

小学校段階における生成 AI を活用した授業展開

札幌市立中央小学校

①実施日 10月25日(水)

②学年・教科・単元 6年 国語 季節の言葉3「秋深し」

③ねらい: 語句と語句との関係について理解する。語彙を豊かにするとともに語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使ったり、使う言葉を吟味したりしながら、よりよい短歌や俳句をつくろうとする。

④授業の実際

季節の言葉を学習した後、短歌や俳句をつくっていく。導入時に文書生成 AI に生成させた秋の俳句「紅葉舞う 秋風さらさら 心落ちつ」を鑑賞する。子どもたちは感想交流をしていく中で、この句の課題に気付いていく。「季語が 2 つあるよ。伝えたいことはわかるけど、直接的すぎる。」「『心落ちつ』ってリズムが悪いし、意味が分かりにくいなあ。」と批判的に読み取っていく。

「では、どんなことに気を付けて俳句を作っていけばよいだろうか。人間らしく想像力をはたらかせて「秋」という言葉を使わないで「秋」らしさを表現してみよう。」と本時の課題を設定する。

語感や言葉の使い方を吟味しながら短歌や俳句を作っていく。「さんまって使うとそのまますぎるし、漢字にすると秋がはいってしまうからもっと直接的になってしまう…。焼さんまには大根おろしが合うから、大根おろしを使ってさんまを表してみよう。」と想像力をはたらかせる児童の姿も見られた。

吟味を重ねた俳句を授業支援アプリで全体共有し、互いに添削、コメントしていく。さらに磨きがかかった表現にしたものを提出する。次に児童は、完成した作品を画像生成 AI に流し込み挿絵を生成する。「先生!『燃える木々』という表現をそのまま流し込んだら山火事のような、炎上している絵になってしまいました!」という児童もあり、隠喩は生成 AI には伝わりにくいところがあるため意図した表現になるように試行錯誤しながらプロンプトを調整する必要があることを説明した。画像生成していく過程で、伝えたい表現にするために言葉を補ったり、言い換えたりしていくことで語彙を豊かにしていく様子が見られた。

⑤授業の振り返りから

授業後の振り返りでは、「AI で画像生成するのはとても便利であるが、間違った使い方をすると自分の学びにとってよくないかもしれないから気を付けて使いたい。」「今後も授業で生成 AI を使ってさらに理解を深めていけるのではないかと思った。」など生成 AI との付き合い方に関する記述をした児童が 41%いた。学習内容のみならず、AI との付き合い方について考えを深めることもできると考えられる。



	<p>秋を俳句や短歌に表しましょう。</p>
<p>秋という言葉を使わずに空気を表現するのはとても難しかったけれど自分の表現力が上がった気がするので自分にとってとてもいい経験だったと思います。</p>	
<p>秋の宵 無数の光 明瞭な</p>	